Dick King-Smith 著
Saddlebottom の構造の特徴とその呈する希望について

稲　田　依　久

An Analysis of the Structure of *Saddlebottom* and of the Hope It Offers

抄　　録

本論は Dick King-Smith 著　*Saddlebottom* の構造の特徴を「みにくいアヒルの子」と「シンデレラ」との類似から述べ、*Saddlebottom* のテーマを探る。

キーワード：構造、児童文学

(1996 年 9 月 6 日　受理)

Abstract

This bookreview points out some of the features typical to the fairy tales found in *Saddlebottom*, discusses its smimilarities to "Ugly Ducklilng" and "Cynderella" in the structure, and suggests the theme of *Saddlebottom*.

Keywords: Structure, Fairly Tales, Children's Literature

(Received September 6, 1996)

I

Dick King-Smith の作品 *Daggie Dogfoot* 及び *The Sheep-Pig* を自己の可能性追及のメッセージを呈するものとして論じた[注1]のに次いで、同じく仔豚を主人公にしてその生き方を描いた *Saddlebottom*[注2] の紹介と同作品の構造の特徴及び主人公の生き方が示唆する自己、生への希望の可能性を以下に論じる。

II

Saddlebottom は前掲二作品と同様、仔豚を主人公とする動物ファンタジイ[注3]としての児童文学作品である。三作に共通した特徴としては、まず物語の展開の要点として主人公の「孤立性」[注4]、主人公が「決定的に大事な場面に於る忠告者」[注5] を得るという昔話の手法をとりこんでいる点である。また動物の固有の世界を確立させるために動物と人間との間の言語による伝達、意志疎通が不可能である点[注6]である。一方、同じ昔話の手法である「他者への親切」[注7] は前二作では主人公の特質であったが、*Saddlebottom* では主人公から猫 Bendigo に対してだけではなく、主人公に対して親切に振舞うことで自らの利益. 幸福を手にいれる登場人物としての猫 Bendigo としてもとりいれられている。しかしながら自己実現というテーマに関してはその契機には共通点が見られるものの、*Saddlebottom* では自己の可能性追及に於て前二作にみられた主人公の意志、努力にさほどの強調がおかれておらず、その過程に於る主人公の動物、人間に対する姿勢に変化が見られる。

まず自己実現を志す契機であるが、豚の宿命として Saddlebottom も肥らされ、人間の食用に供されるために殺される運命に不安を抱いているなかで、たまたま耳にした軍楽隊の演奏する音楽に心がおどり、自己の内なる興奮 (p.72) を体験し、訳の分からないうちなる力に促されて部屋の中を歩きまわり (p.72)「一緒に行進できたら死んでもいい」(p.74) と表現する。これは Daggie が泳げるようになりたいと、また Babe が牧羊犬になりたいと自ら望んだ自己の能力開発とは少しく種類を異にしている。ここには意志、意図といった理性範疇の欲求はなく、訓練の結果として新たに獲得する技能、またそれに於る熟達でもなく、生得的才能として Saddlebottom のなかに潜在していた能力の顕現化という偶然性が大きく作用している。更には Saddlebottom 自身はこの音楽的才能をそれまで自覚したことはなく、この後も自分自身の才能として自覚することはない。ただ、猫の Bendigo がこれを Sad (Bendigo が Saddlebottom につけた愛称) の才能と認め、人間に気付かせる計画をたてて Sad がこれを実行して成功する。その後は人間が Sad の才能をいかす方法を考えだし、更には Sad を連隊のマスコットとして大切にする。そのように殺される運命から自由になった後も Sad は自己の音楽的才能を自らの生の意味を創り出す積極的要因である能力、技能として認識することなく、ただ音楽にあわせて軍楽隊の先頭で行進することに純粋な喜びを感じているのである。Daggie や Babe が自らの技能、技術を用いることを使命として行為するなかに自己存在を確認、確立した生き方と比較すると Sad の生き方は無自覚、無明なものに見える。

次いで人間との関係式に於ても相違点が見られる。*Daggie* では唯一の人間登場人物である養豚業者は「召使」であり、Daggie によって洪水の中を救出されるという下位の存在であった。*The Sheep-Pig* では Babe は農場主 Hogget に初対面から好感を抱き、養母となった牧羊犬 Fly と共にその農場に居続けるために Hogget の役に立つ存在になりたいという意志を抱いて、Hogget の命令通りに働く牧羊豚となる訳で、表面上は主従の関係を呈している。が、その関係の基盤を支えていたのは感情的に、また存在として互いに好意を抱いている、という互いを尊重しあう点での対等の立場であった。が Saddlebottom に於ては人間は Sad の銃創の手当をし、住居を与え、餌を与え世話をし、Sad の好きな音楽を与えてくれ、音楽にあわせて行進する機会を与えてくれる恩恵者として登場する。Sad 自身の見るところも同様で、当初は「囚人」(p.64) でしかなかったが連隊のマスコットとなってからはその任務を果たすことで連隊に属する人間達に評判と名誉を与えて貢献するが、Sad の理解する人間（兵士達）とは「親切」(p.59) で「好ましい」(p.90) 存在であって決して召使などではないのである。この点でも Sad には前二作の主人公達のような意識的に自らの存在を主張したり、存在意義を見いだそうとするような実存的姿はみられないのである。しかしながら、猫の Bendigo は人間の気まぐれや愚かしい一面を見抜いている。のら猫である Bendigo に対する町の住人達の態度が親切であったり、つれないものであったりすることに対して自分にやさしくしてくれる一家を素早くみきわめてその親切を自分の為にうまく利用する才覚を有し (pp.37-39)、役職や地位が高いからといって立派な人物とはかぎらないことを知っており (p.75)、兵士達は好人物ではあるが騒々しいのが難点であると批判する (p.91)。ここには本質を見抜く知恵の前には人間も批判の対象であることが示されている。

更に動物同士の関係にも前二作との相違が見られる。勿論、共通点としては「忠告者」[注8]、親切にしてくれる動物の存在[注9]がある。 が忠告者が主人公に全面的に関与して主人公が実存的存在としてあり続ける過程に深くかかわった前二作と比べると、*Saddlebottom* に於ける忠告者ネズミと猫の Bendigo の果たす役割は主人公である Sad に親に代って名を与え、行動の契機を提供するにとどまっているといえる[注10]。加えて家族関係も前二作とは異なっている。*Daggie* では母豚がひ弱に生まれ、足の変形した息子を愛し、かばい、*The Sheep-Pig* では養母となった牧羊犬 Fly が養子を慈しみ、教育に情熱を傾けた。が *Saddlebottom* に於ては母豚が、単に体の白い模様が本来とは異なる場所、肩ではなく臀部にあるというだけで他には何の欠陥もない息子を疎んじ、名前すらつけずに邪樫にする。兄弟姉妹もその母親の態度を見て Sad を無視し、行動で、言葉で苛め、疎外する。血のつながった母親、兄弟姉妹と愛に富んだ関係を結べない不幸と孤独を Sad は味わう。自らの存在を家族に受け入れられず、また自らの存在意義を認める縁のない Sad は、忠告者としてのネズミ、猫の Bendigo にそれぞれ Saddlebottom、Sad という愛称を与えられることで辛うじて名付けの行為、即ち存在が認められることとなって、Sad は自己認識をえる。この自己認識、自己存在確認は後に連隊の人間達との関係によって更に補われることとなる。が家族が Sad の人生にあって常に否定的な存在であり続ける悲劇は、終盤の農業祭で

母親に再会した時に再度おきる。農業祭で母親を見かけ、ママと呼ぶ Sad をその特徴的な模様から、かつて邪樫に扱った恥ずべき息子と認識した瞬間、母豚は Sad に背を向けて走って逃げ出す。その後も Sad を息子と認めないこの母親とは和解も理解もなされないまま物語は終わるのである。

このように主人公の位置を中心に据えて三作を比較すると、三作は同じ家畜としての仔豚が主人公でありながら Sad と Daggie、Babe とはその孤独の深さ、死から生へと運命の転換する契機の拠るところに違いが見られる。Sad の場合は前二作と比べると、物語の展開に於て偶然性におかれる比重がより大きく、人間の優位性のまえに主人公の生き方に主体性があまり見られない。また主人公は家族に受け入れらることなく否定的な存在として描かれたままである。このような主人公 Sad を作者 Dick King-Smith が未来を生きる児童にむけて敢えて書こうとした意図はどこにあるのであろうか。実際、生は確かに孤独で、避け難く死にむかって進んでいく道程であり、生きる現場は拠るべき確かなものとてない、希望の抱けない不条理の連続、偶発事の集積である。Sad を通して、たまたま生じた出来事を選ぶことしか許されていないという絶望的、受動的生き方しかないことを示そうとしているのならば Sad が到達した幸福は単なる偶然でしかないことになる。しかし Daggie と Babe を通して自己実現の途を自ら拓いていく物語を書いた Dick King-Smith が、生き方としてはある種の後退ともいえる生き方を若い読者に呈するとは考えにくい。そこで作者が *Saddlebottom* の生き方に託したメッセージ を物語の構造から以下に考察する。

Ⅲ

Saddlebottom の物語の構造上の特徴として第一にあげられるのはアンデルセンの「みにくいアヒルの子」[注11] との類似である。ひとかえりのヒナの一羽、仔豚のうちの一頭が仲間と同じ姿でないことにより苛められ、母親からも疎んじられる点、逃げ出したさきで灰色ガン、猫という理解者に出会う点、他者に対して丁寧、礼儀正しい応対をする点、おばあさん、兵士といった人間に飼われる点、そして最後に白鳥としての美しさ、音楽的才能を認められて幸福な思いを抱くに至る点である。細部、具体事には差異があるものの物語の展開は酷似している。母親に疎んじられるのは子供にとっては哀しく、辛いことではあるが、それによって主人公達は家族と離れ、親から独立する。これは「ヘンゼルとグレーテル」の物語を分析したベッテルハイムの言、「世の中へ出ることによってしか、自分自身を確立できないことを子どもたちに教えているのだ。それは子どもたちが両親への依存をたちきって独立した存在になるのを助け、導くのである。」[注12] に呼応する。更には生き方を決する決意が、昔話で聖数とされている三に[注13]まつわるところの三度行われ[注14]、死んでもいいという第三の決意が両者に最終的な幸福をもたらす。小沢俊夫が「昔ばなしとは何か」で「外観と内実のくいちがいが昔ばなしのドラマを形成し、...外観はストーリーとして一線上に投影される。そして、そのうちに実質が発見されて、ストーリーのクライマックスを形成する」(p.171) と述べているように両物語ともに実質発見の物語であるといえる。

その過程で苛められ、苦悩に満ちた辛い生活を経た後、自分自身が持している特質を発見できるに至るためには最終的に生命を賭ける決断と覚悟が必要であること、そしてそうすることによって自分自身を発見する喜びが得られることが共通しているのである。

これを当事者をとりまく状況を含めて考えると、「物差しは一つでない…人間への多面的な評価」(p.181) と「昔ばなしとは何か」で小沢俊夫が指摘する点につながっていくと思われる。アヒル社会、血統種の豚の社会で大きさ、形、模様が異なるというハンデイキャップを有するが故に苛められ、疎んじられる存在が、実は美しいものがその美を顕現する前の段階であり、音楽的才能を秘めていることが未だ知られていない状態にあるだけであるという時期が熟すのを待っている存在であること、いつも他者に丁寧で礼儀正しく接する美徳を有してひとりよがりなネコやニワトリをも否定することなく、猫の肉体的ハンデイキャップ…交通事故の後遺症であるウインクと微笑み…を好意的に受け入れられる心の広さを有している、といった多面的な見方、評価をする必要性を示してもいる。「みにくいアヒルの子」との類似的構造を与えることで主人公のたどる道程、到達点の予想がつくと同時に *Saddlebottom* 独自の具体的細部に更に興味がひかれる効果をもたらしている。

第二には Saddlebottom というニックネームを与えたネズミ、Sad というニックネームを与えた Bendigo の名付け親としての役割、息子を疎んじた母親への報復がそれぞれペローの「シンデレラ」[注15] の物語の仙女、継母と二人の姉の場合に類似している点である。実の親ではなく名付け親が名付け子の可能性を引き出す手助けをする主体となり、主人公を疎んじた者の利己心が彼らに破滅をもたらすのである。ここでも名付け親の手助けの方法、疎んじた者の破滅のしかたといった具体事は異なるものの、生き方に与えられる勧善懲悪的基本構造は同じであるといえる。

以下の三点は全体的な構造ではないが *Saddlebottom* と他の物語との特徴ある共通点としてあげておく。まず Bendigo の微笑みが「不思議の国のアリス」のチェシャー猫を想起させる点である。チェシャー猫はいつもニヤニヤ笑っており[注16]、その姿がゆっくりと消えた後も微笑みだけが暫くの間残っていた (p.90) ように Bendigo の微笑みも顔にいつも浮かんで消えないものであり、"Grin like the Cheshire cat" という表現そのままに意志、感情に関わりなく、しかも肉体に加えられた損傷という痛み、苦しみのゆえに絶えず「訳もないのにニヤニヤ」していなければならない Bendigo なのである。しかし Bendigo は彼の現状を過不足なく受け入れて、すべてをあるがままに見ている。これは苦境にあってのある種の達観を伴った生き方を示唆しているといえる。

次いで、同じく「不思議の国のアリス」の仔豚 (pp.85–86) の存在が Sad に重ねられる点である。公爵夫人が「豚！」と呼びかけた男の赤ん坊 (p.82) を、そのまま放っておけば殺されるかもしれないとアリスが抱いてあやしていると、いつのまにか豚にかわってしまっている。豚が実は人間の男の子が変身させられたものであるという物語を下敷にして、Sad という豚を人間におきかえて考えてみても同じことなのだという作者の意図、暗示と解することができるのではないだろうか。

最後に、Sad が V 字型の傷痕ゆえに兵士達から伍長代理、Lance、という名を付けられ

た時点でLancelotという男性名が想起させられる。それが最後に爵位（knight）を与えられる場面に至ってアーサー王の円卓の騎士（knight）ランスロットと結び付くこととなる。この点に関しては名前の共通点のみで人物、構造面での類似には至っていない。

以上のように伝統的な物語を想起させ、示唆する構造、登場人物が担う意味としては二点の可能性が挙げられる。その一は「帰属感」[注17]、即ち聞き知っている昔話が共通していることが人々の間に生み出す連帯感を、この場合はSaddlebottomという物語と読者の間に生み出しているといえよう。即ち「みにくいアヒルの子」、「シンデレラ」、「不思議の国のアリス」、「アーサー王と円卓の騎士」の物語への馴染み、親密さが「可変性」[注18]としての具体事への関心を高める効果をもたらしているといえる。これはいいかえれば人間が生きていくこと、人の生が有している普遍性への共感であるといえよう。その二はリューテイの言う「あらゆることが可能である」（p.194）昔話の世界にSaddlebottomを重ね合わせることで奇跡の可能性を前提としながら奇跡のような偶発事とみえる出来事が実は決意、意志、意思することによってある方向に向かう必然性を生じさせ、その必然性が今度は出来事、事態をひき起こすことになるということを示唆している。この意味で偶然、奇跡と思われる出来事は象徴的に決意し意志する生き方を照射しているといえよう。

一見後退したかにみえる作者の呈するSaddlebottomの主人公の生き方は、伝統的物語の構造を借りることで、思うがままにならない現実世界をそれでもなおあらゆることが可能でありうる世界にしうる、奇跡を生じさせる世界にしうる希望が意志と決意、行動に潜在していることを示唆するものであるといえよう。

概　　要

イギリスのある農場でWessex Saddleback種のなかでも最良の血統であることを誇りにし、自らを「女公爵」と呼ばせている高慢な牝豚が十頭の仔豚を産む。なかの一頭の牡仔豚が本来の模様――黒い体に背中から前足にかけて鞍をおいたように白い――ではなく、お尻が白く生まれついていた。この欠陥を下品で教養のないネズミに指摘され、更にはSaddlebottomというニックネームをつけられて、母豚はSaddlebottomを疎ましく思い、「目をつむって乳はやるが考えるのもおぞましい」（p.17）存在として名前もつけず邪樫にする。農場中の動物から好奇の目で見られ、九頭の兄弟姉妹からものけものにされ、からかわれ、後には無視されいじめられるSaddlebottomは不幸であり、生きていることが惨めになる。生後二ケ月になって間もなく親許から離れるという頃、母豚は九頭の仔豚に血統がもたらす輝やかしい未来の話をして聞かせ、一方Saddlebottomには「他の方法で役にたつように」（p.21）とだけ言う。その意味を農場内で唯一声をかけてくれる存在であり、それゆえに礼儀正しく接してきていたネズミに尋ねたSaddlebottomは、殺されて人間の食用に供されることだと教えられる。同時にネズミはどこか広い世間に逃げることをすすめる。

その朝のうちにネズミの助けをかりてSaddlebottomは逃げ出して森に逃げこみ一夜を木のうろで明かす。翌朝そのうろの中で片目をつぶってウィンクし、微笑んでいる猫

Bendigo に出会う。彼のウィンクも微笑も実は交通事故の後遺症であったのだが Saddlebottom は Bendigo に好意を抱く。そこで「一人で暮すのはちょいと寂しい」(p.34) からと Bendigo は Saddlebottom に Sad という愛称をつけて一緒に森で暮し始める。誰が探しに来るでもなく、Sad も農場をなつかしがるでもなく一ケ月が幸せに過ぎる。

ある日突然 Bendigo が冬を例年のように町の人家で過すと言い出し、農場に戻っても、森で冬を越しても、軍の演習場に迷い出ても死ぬのが運命なら町に出かけようと Sad は決意する。その夜町に行くために Wessex ライフル射撃隊の演習場を横切っている時、深夜射撃訓練に出くわし、Bendigo は兎穴に避難するが、頭しか入れなかった Sad は白い標的と酷似したお尻に銃弾を受け V 字型の傷を負う。兵士に発見されて、軍医の手当てを受けた後、担架に乗せられて連隊に運ばれる。Bendigo も秘かに後を追う。

連隊では優柔不断な連隊長にかわっての特務曹長の決断で Sad は古い留置場の一室、三度の食事のうえに世話係の伍長まで与えられ、V 字型の傷が伍長勤務上等兵 (Lance-Corporal) の肩章に似ていることから Lance という名も与えられて暫くは幸せに暮す。がネズミが言ったような将来が来るかもしれないと思うと悲しみで胸がふさいだ。がその夜 Bendigo が現われ、連隊の厨房舎でネズミとりをして役にたちながら機嫌よく暮していることを告げ、二匹はまた一緒に時間を過すようになる。

日曜日の朝、軍楽隊が演奏しながら行進しているのを聞いた Sad はそのリズムにあわせて我知らず部屋の中を行進し、「楽隊と一緒に行進できるのならなんでもする」(p.72)「死んでも悔いはない」(p.74) と言う。それを聞いた Bendigo が一計を案じて次の日曜の朝を待つことになる。「頭のいい将校に Sad の音楽的才能を認めさせる」(p.75) という Bendigo に選ばれたのは軍医で、病気に見せかけるために朝食をぬいた Sad を診察に来た軍医が軍楽隊の音楽にあわせて行進する Sad に気付いて、その夜再度テープの音楽で Sad に行進させて将校達に様子を見せる。勘の悪い情報将校以外の四人はその場で連隊と同じ Wessex の名のつく品種であり、お尻の銃創が連隊のモットーの頭文字と同じ V である Sad を連隊のマスコットにしようと思いつく。

翌日から特訓が始まり「早足行進」、「回れ右」、「止まれ」の号令を一週間で覚え、部屋の入口には金文字の表札板が掲げられ、マスコットとしての地位を確保した Sad は食べられる運命から解放されたことを確信する。冬の間に大いに進歩した Sad は引き具もつけず、銀の頭のついたマラッカ杖で肩や背中に触れられるだけで命令を理解するようになっていた。その上達した行進ぶりを見た陸軍大将が六月の農業祭の60周年記念ショウに出ることをすすめる。

農業祭の前夜会場に到着した Sad は母親を見つけるが無視されてしまう。Bendigo が夜遅く母豚に「息子の Sad はスターになる」(p.111) と言いに行き、母豚は模様に異常のある息子がいることを豚仲間に暴露されて面子を失う。

農業祭の当日、Sad の先導で行進を終えた軍楽隊をねぎらいに王家の婦人が壇から降りてくる。次々とメンバーが声をかけられ微笑みかけられて最後に Sad の順番になる。「なんて可愛い豚」(p.115) とパラソルで Sad の背中を掻いたところ、Sad は訓練された通り

すぐに坐って待った。Lance と呼ばれていると知った婦人は目を輝やかせて「特別な日ですから位を授けましょう」(pp.115f) と言ってまたパラソルの先を肩甲骨の間にあって「立て、ランスロット卿」(p.116) と言われた。その言葉の意味は解らぬまま、触れられた場所を合図に Sad は立ち上り、足ぶみを始めた。婦人も観集も大いに驚き喜んだ。連隊中の人々 (情報将校だけは Sad を牝ととり違えたが) から賞められた Sad は連隊のマスコットの兵士豚として幸せにその夜眠りについた。

注

1) 大阪女学院短期大学紀要　第24、第25合併号
「Dick King-Smith の作品に於る可能性追及のメッセージ」
2) *Saddlebottom*, Puffin 1988
3) 吉田新一編 1987「ジャンル、テーマ別英米児童文学」中教出版 p.252
4) 小沢俊夫 1990「昔ばなしとは何か」福武文庫 pp.38-39
Saddlebottom に於ては母親、兄弟姉妹に疎んじられ、苛められ疎外されることに始まり、森で出会った猫 Bendigo と共に暮らすが、猫には猫の生き方があるという点でやはり主人公の Saddlebottom は孤独であり、連隊に住むようになっても豚は一頭しかいないという点で孤独である。
5) 同上 pp.134-135, pp.164-170
Saddlebottom に於ては愛のない家族と共にある孤立よりも孤独になっても自分で自らの道をきり拓いて、生きる幸せを手に入れるためには農場を逃げ出すしかないとネズミが忠告を与え、逃げる手助けをしてくれた点、また森でいきる術をおしえてくれた猫 Bendigo が更には Saddlebottom の音楽的才能を人間に認めさせる計画をたて、Saddlebottom に実行させた点である。
6) Saddlebottom は行進の訓練を通していくつか人間の言葉による命令を理解できるようになったとされている。が "Halt" や "About Turn" についてはそれ以上直進できない状況 (p.88) にあったこと、また "Right Turn" や "Left Turn", "Mark Time" に関しては伍長が杖で Saddlebottom の肩や肩甲骨の間を軽くふれる (p.97) という動作に反応したものである。このことは「言葉の意味は皆目分からなかった。が肩の間に触れられたその意味は理解した。」(p.117) という箇所に明かである。即ち Saddlebottom の人間言語理解とみえるものは触れられることと演奏される音楽との関わりによるもので、Saddlebottom の音学的才能が人間との交流の基盤を支えている。
7) 小沢俊夫 1990「昔ばなしとは何か」福武文庫　pp.196-198, pp.208-209
8) *Daggie* に於る Felicity、*The Sheep-Pig* に於る Fly と同様 *Saddlebottom* でのネズミと Bendigo
9) Daggie に於る Felicity と Izaak、*The Sheep-Pig* に於る Fly と Ma と同様 *Saddlebottom* では Bendigo
10) 森で共に暮らした後、猫の Bendigo は冬を人間の家で過ごすために森を出るので Saddlebottom に一人で生きるように (p.37) 言い渡したり、連隊の軍楽隊と行進することを望む Saddlebottom のために計画をたててやるが、その後は塀の上で様子を見たり (p.83)、大成功の行進の後も Saddlebottom の住居に来て Saddlebottom の傍らで横になる (p.118) だけである。ただ Saddlebottom の母親の Dorothea が農業祭で Saddlebottom を拒絶したその夜は Dorothea に会いに行く。Dorothea が Saddlebottom を息子と認めないままいると、Saddlebottom は Dorothea にも、Saddleback 種の他のどの豚にも似ていない (p.111) と言いおいてその場を去る。しかしこの時もそれ以上関与しようとはしない。
11)「アンデルセン童話集 2」大畑末吉訳 1988 岩波文庫
12) 野村ひろし「昔話と文学」1993 白水社 p.55
13) 小沢俊夫 1990「昔ばなしとは何か」福武文庫 p.90
14)「みにくいアヒルの子」では、1. 親元からの逃走 (p.131)、2. おばあさんの家からの逃走 (p.

138)、3. 殺されてもいいと白鳥に近付く（p.141）
Saddlebottom では、1. 親元からの逃走（p.28)、2. 森から町に移り住む（p.42)、3. 軍楽隊と一緒に行進できたら死んでも思い残すことはない（p.74）

15)「ペロー童話集」新倉朗子訳 1988 岩波文庫 pp.211-224
名付け親の仙女が舞踏会に行くシンデレラの支度をする
「グリム童話集 1」1989 金田鬼一訳 岩波文庫 pp. 221-222
シンデレラを疎んじた二人の姉が鳥に両眼をついばまれて失うという報復を受ける

16) *Alice's Adventures in Wonderland* Lewis Carroll, Puffin 1988 pp.81-82

17) 小沢俊夫　1990 「昔ばなしとは何か」福武文庫　pp.224-226

18) プロップ 北岡誠司、福田美智代訳 1983「昔話の形態学」白鳥書房 pp.139-146

参考文献

Carroll, Lewis. 1988. *Alice's Adventures in Wonderland,* London: Puffin
King-Smith, Dick. 1988. *Saddlebottom,* London: Puffin
King-Smith, Dick. 1980. *Daggie Dogfoot*, London: Puffin
King-Smith, Dick. 1985. *The Sheep-Pig*, London: Puffin
野村ひろし. 1993.「昔話と文学」, 東京: 白水社
小沢俊夫. 1990.「昔ばなしとは何か」, 東京: 福武文庫
プロップ　北岡誠司、福田美智代訳. 1983.「昔話の形態学」, 東京: 白鳥書房
「アンデルセン童話集 2」大畑末吉訳. 1988, 東京: 岩波文庫
「グリム童話集 1」金田鬼一訳. 1989. 東京: 岩波文庫
「ペロー童話集」新倉朗子訳. 1988. 東京: 岩波文庫